外来がん薬物治療患者における保険薬局クリニカルパスの開発と有用性検証

谷本　愛　　そうごう薬局　天神中央店

緒言

外来がん薬物治療の効果を最大限に高めるために、保険薬局においても経口抗がん剤の処方鑑査、副作用対策を十分に行い、患者のアドヒアランスを向上させるファーマシューティカルケア(以下 PC)が必要である。そうごう薬局天神中央店では外来がん薬物治療患者の PC を標準化し、かつ質を向上させるために『外来がん薬物治療患者における保険薬局クリニカルパス(以下パス)』を開発、運用している。今回、パス使用前後の副作用確認率、疑義照会の内容を比較することで有用性を検証した。

方法

パス使用前の期間を 2014 年 10 月～2015 年 9 月、使用後の期間を 2016 年 10 月～2017 年 9 月とし S-1 単独療法患者への副作用の聴取状況を確認した。服用開始から 3 コース分の薬歴を参照し、確認すべき副作用を好中球減少、貧血、血小板減少、下痢、口内炎、悪心・嘔吐、食欲不振、色素沈着、皮疹、間質性肺炎、流涙の 11 項目とし、確認した副作用項目数を確認率として算出し比較を行った。また同期間中に当薬局に来局した外来がん薬物治療患者への疑義照会の内容を後方視的に調査した。その内容を①薬剤の適正使用についての確認(添付文書上確認が必要なこと)②服用開始日、次回受診日情報による抗がん剤処方日数調整提案③支持療法薬の残薬確認による処方削除・日数調整提案④抗がん剤、支持療法薬の処方継続の有無確認⑤アドヒアランス不良患者への支援⑥体調変化、副作用予防・発見などによる支持療法薬の提案⑦その他の 7 つに分類し、全体の件数とそれぞれの件数をパス使用前後で比較した。

結果

S-1 単独療法患者の全体での副作用の確認率はパス使用前では平均 38.8%、パス使用後は平均 59.2%と有意に上昇した。また疑義照会の件数はパス使用前の 61 件(1.04%)から使用後は 160 件(2.44%)に増加し、特に①薬剤の適正使用についての確認、④抗がん剤、支持療法薬の処方継続の有無の確認、⑥体調変化、副作用予防・発見などによる支持療法薬の提案の項目がそれぞれ増加した。

結言

パスを使用することで副作用の確認率が有意に上昇し、疑義照会の件数が増加した。これは薬局での外来がん薬物治療患者への PC において確認すべき事項を網羅的に確認でき、発見した問題点に対し標準的な介入ができるようになったためと考えられた。以上よりパスの開発・運用は外来がん薬物治療患者への PC の質向上に有用であることが示唆された。